卯月会と三笠宮殿下の思い出

卯月会事務局長
衣笠　陽雄　陸自69

三笠宮崇仁親王殿下は平成28年10月27日、百歳の御長寿を全うされ薨去された。殿下を会の盟主・シンボルと仰いだ卯月会は、とうとう正会員不在となってしまいました。

まだ妃殿下を始め、お元気な準会員の方々は残っておられますが、求心力を失った会は大きな衝撃を受けると共に、活動の転機を迎えています。

殿下が戦後「卯月会」と命名された陸士第48期生会は、皇族を同期生として迎えた稀な期として、戦争を戦い、敗れ、そして戦後も殿下を中心に、鉄壁の団結力を保持し、誇り高くも逞しく生き抜いてきました。

その名門の事務局長という職務を通じ、私は殿下から多くの薫陶を頂きましたが、その思い出の一端を述べさせていただきたいと思います。

私が殿下と初めてお会いしたのは、幼稚園の時でした。殿下が自宅に来られた時、悪ふざけして殿下が父と笑っておられたことを覚えています。

その後、父に連れられて辻政信の講演会に行ったのですが、その時、中央で静かに座っておられた眼鏡の紳士が、殿下だったと後から知り、印象を強めていったのです。

その後私は、陸上自衛隊に勤務し、定年後、父の死去を契機に卯月会へ入会を誘われ、平成20年の総会で事務局長に任命されました。

その総会の席で殿下が「衣笠君が快く引き受けてくれて良かった」とのお言葉を賜り「やらねばならない」と気持を引き締め、以降約9年間、いたらぬ事務局長として会のお世話をさせてもらいました。と言うより、正会員の皆様から、常に叱咤激励を受けていたという方が適切です。

しかし殿下から、厳しくも暖かなご指導を賜ったことは、人生にとって終生忘れえぬ経験となりました。

殿下は、古代オリエント文明研究の学者としての第一人者であられ、他面で馬術、ダンス等の趣味をお持ちでした。その全てにおいて造詣が深く、係わられた分野で素晴らしい才能を発揮されたことは、皆様もご承知のことと思います。

私は殿下から、様々な有益なお話をお伺いし、又御指導を頂きましたが、そのたびにその的確さに驚かされ、自分の未熟さに気付かされたものです。

イスラム関係だけは、私にとって難しく、理解困難でした。しかしその他の話は、本当にためになる内容が多いものでした。特に美的・色彩感覚は素晴らしく、繊細で、目から鱗の話が多くありました。

例えば、日本人の色彩感覚の優れている証拠として、「十二単（ひとえ）」の着物の

衿の色と、その配列について御話を伺った思い出を紹介します。

殿下は、「この様な色を見つけ、この様に配列した日本人の色に対する感覚は世界のどの民族も持っていない。しかも千年も前に十二単という形を確立し、又それが変わらずに現在まで継承されているということも凄いことなのだ」と、申されました。

普通は、「十二単」を見てもきれいだ位の印象しか持たないのですが、殿下はとことん研究されておられるようでした。

又、俳句にも、色についての殿下の句、「一つとて　同じ色なき新樹かな」に窺えます。春になると木々は緑色を逐次濃くしていくが、同じ色の木など一本もない。宮邸の庭の木をよく見ると、確かに同じ色の木の葉にも僅かな違いがみられる。しかし更によく見ると、幹の色も違う」とおっしゃられたのには驚かされたものです。

とっさに、「それは光線等による明暗とかで、違うのでは?」と申し上げようとしましたが、その時は何も申し上げませんでした。

ところが、「反論などしなくて良かった（!）」と気づくことになったのです。というのも、この件でその直後、大失敗を犯したのです。

私がこの句を『偕行』花だりに紹介した時、「一つとて……」という部分を「一つとせ……」と誤記したため、大問題になりました。発刊直後、直ちに宮家に出頭を命ぜられ、「俳句というものは一字違えば全く別物になる云々……」と宮務官を通じて厳しいご指導を賜りました。

今思えば本当に汗顔の至りですが、殿下がその時直接指導されなかったのは、「余程ご立腹だったのでは」と深く反省した次第です。

偕行社の先輩からは「昔なら切腹ものだ!」等々指摘され、暫くは意気消沈がつづいたのですが、殿下はそれ以降その件は一言も言われず、通常と同じ指導をされたのには、またまた頭の下がる思いでした。

殿下御自身、卯月会のことをどのように思われておられるのか気になっていました。しかし、「卯月会の今後」についての御指導を受けたとき、以前の総会でも言われたことを繰り返し申されたのです。

「この会は、三笠会でも私の私的な会でもなく、陸軍士官学校第48期生の会であるので、私を特別扱いしないように」と、何回も言われたことです。これに対し正会員の考えは、「それは殿下のお考えであって、我々にとっては殿下が全てであり、特別な存在として崇め奉るのは当然である」との考えでした。

全く両者正反対の考えで、傍から拝見していると、殿下は御不満そうでしたが、内心は仕方ないと諦めておられたのかもしれません。

しかし、この「上から慈愛」と、「下からの崇拝」の思いが結び付き、融合したのが卯月会であったと思っています。殿下が上からの目線だけで見ておられたら、この様な強固な団結を誇る組織は生まれなかったと考えています。そこに、「鉄の団結」の原点を見た思いがいたしました。

その双方が消えた今、「残された我々若手（二世）会員は何をすべきか」という難しい問題を突きつけられています。殿下にこれらの問題についてご薫陶を頂けなかったことは、事務局として返す返すも悔いの残る「最後の大失敗」でした。

殿下の御葬儀に於いて、「正寝移柩の儀」直前の10月29日、卯月会秋山代表以下11名は、三笠宮家に弔問記帳に伺いました。一般記帳所でなく、特別に宮邸内での記帳を許されたのです。

終わって退去しようとした時、坂倉宮務官から、「妃殿下からお許しを戴いたので、殿下の安置部屋で拝礼をして下さい」との御言葉を頂きました。突然で驚いたのですが、矢島準会員を先頭に全員で伺いました。

安置された場所は、小さな部屋で、柩と両陛下、総理の花以外は何もなく、極めて簡素な作りでした。おそばに妃殿下が車椅子に座られ、柩のお守りをされておられました。会員は、一人ずつ殿下の御尊顔を拝し、拝礼し、妃殿下にお悔みを申し上げ退室しました。

最後の御対面を全員にさせて頂いたことは、参列者全員の終生最大の感激となりました。

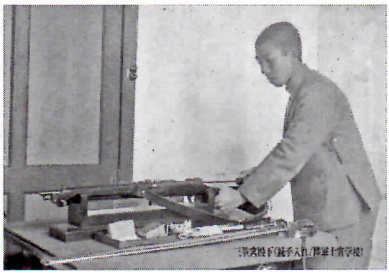
又、本葬の斂葬の儀への参列は、宮内庁からの連絡で知らされたのですが、三笠宮家からのご指示であると聞かされました。これらは当然、妃殿下・宮務官の御判断での御措置であったと思われますが、私どもとしては思いもよらない栄誉でありました。

そうした思し召しは、卯月会が三笠宮家との関係が深かった証左であり、卯月会は今後も殿下の御遺徳を顕彰し、三笠宮家を支えるべく活動しなければとの思いを深くした次第です。

最後になりますが、三笠宮崇仁親王殿下の永遠の安らかなる眠りを御祈念奉ると共に、百合子妃殿下の更なる御長寿、御健勝を御祈念申し上げ、筆を置かせていただきます。

三笠宮崇仁親王殿下の御遺影（陸軍士官学校から卯月会まで）

陸軍士官学校予科生徒
（昭８年頃）

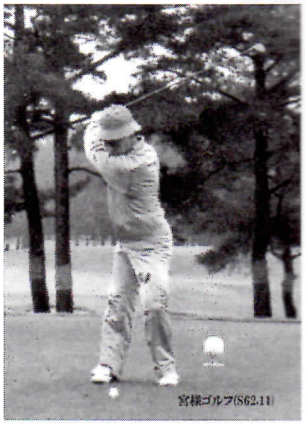


「銃手入れ」
（昭８年頃/陸軍士官学校予科）

士官学校予科での食事

御幼少の頃から馬がお好きだった殿下。乗馬訓練での見事な手綱さばき
（見習士官？　習志野訓練場）

スズランを殿下から贈られ笑顔の妃殿下と（S60．6 卯月会北海道総会）



スポーツ万能の殿下はゴルフもお上手でした
（S62．11宮様ゴルフ）

卯月会総会では同期生との年一回の再開が一番のお楽しみの御様子でした（24年５月/明治記念館）

殿下と同期生との楽しい会話（殿下持参の80年前の写真を見せられて）
（志波氏）殿下これは珍しい写真ですなー。隣は見た事ある様な？。誰ですかね？
（殿下）良く見たまえ！君だよ。君！
（志波氏）殿下の方が姿勢がいいですなー　→（話を逸らすな！と言う様なお顔）

（※写真提供：卯月会　衣笠氏・畑氏）